



Title	A Study on the Spatial Structure of Houses and Open Spaces by the Analysis of Physical Improvements and Daily Activities in the Typical Residential Areas in Kabul City
Author(s)	Toofan, Nabizada
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27579
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【183】

氏 名	トーフアン ナビザダ TOOFAN NABIZADA
博士の専攻分野の名称	博 士（工学）
学 位 記 番 号	第 2 6 2 4 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科地球総合工学専攻
学 位 論 文 名	A Study on the Spatial Structure of Houses and Open Spaces by the Analysis of Physical Improvements and Daily Activities in the Typical Residential Areas in Kabul City (カブール市の典型的住宅地区群における改善行為と生活行動からみた 住宅とオープンスペースの空間構造に関する研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 木多 道宏 (副査) 教 授 横田 隆司 教 授 阿部 浩和

論文内容の要旨

本論文ではカブール市における典型的な4タイプの住宅地区を対象に、住宅の平面構成と増改築履歴、オープンスペースの階層構成、居住者の社会的属性・戸外行動・住要求等を調査し、空間と社会の両面から総合的な評価を行った。また、「自然」に形成された市街地である伝統的市街地と「違反市街地」の分析により、カブール固有の空間形成原理を解説し、これらが旧マスタープラン下と現行の制度下で開発された地区にいかに関係・反映されているかを検討することも目的である。本論文は以下の5章から構成されている。

第1章は序論であり、本研究の背景、目的、方法論を述べるとともに、既往研究における位置づけを明確にした。

第2章では、調査対象地区選定のための基礎的情報を得るため、カブール市の市街化履歴と旧マスタープランの内容を整理し、現在の市街地の特徴を、①伝統的市街地、②旧マスタープランに違反して形成された市街地、③旧マスタープランによる開発地区、④現行の制度化で開発された地区の4タイプに分類した。さらに、①～④に対応する事例として、シャハレ・コホナ、チャハル・カラ、カイル・カナ、シャハラケ・アーリアの4地区を選定し、本論文の調査対象地区とした。

第3章では、4地区について住宅群の空間構成の変遷過程とその原理を明らかにするため、住宅の平面図の採取、増改築履歴とその理由、室の使い方のインタビューを行った。住宅の平面タイプと増改築の方法を類型化したところ、いずれの地区も固有の空間構成に応じた増改築がされており、地区全体の家族や人口の増加、街路沿いの商業機能の充実等に寄与してきたことを検証した。特にチャハル・カラでは、「水平増築」、「垂直増築」、「独立建屋」、「撤去」、「内部改変」の全てのタイプの増改築がされており、世帯の増加、店舗の拡充、テナントスペースの拡充、水回りの拡充、プライバシーの確保など、多岐にわたる住生活の要求が受容されてきたことを明らかにした。次いで、近代的なカイル・カナも比較的「柔軟性」の高い住宅と街区構成を有しており、住要求に対応した十分な増改築のされてきたことを示した。一方、現行の制度化で開発されたシャハラケ・アーリアでの変化は室内の改修に限られており、「柔軟性」の観点から今後の住宅地計画のあり方を再検討する必要性のあることを提示した。

第4章では、4地区を対象に、居住者の社会階層、生活慣習、施設やサービスに対するニーズを調査した。また、街路・敷地内空地などオープンスペースの階層構成を分析し、戸外行動との関係性を確認した。施設の整備状況については、無計画に形成されたチャハル・カラと、公園が住宅地に開発されたカイル・カナの両地区において不十分であった。シャハレ・コホナ、チャハル・カラのような「自然形成的」な市街地ではオープンスペースの階層性が整っており、他の「計画的」な市街地では階層性に欠落が見られた。しかし、「アクセシビリティ」が悪ければ、階層性の整ったオープンスペースでも利用度の低いことを明らかにした。現代に開発されたシャハラケ・アーリアは、(イスラムの慣習が厳格とされるアフガニスタンにおいても)女性の解放が進んでおり、女性の戸外行動が圧倒的に多く見られたものの、他の敷地内空地で行われていた家事や交流が見られず、カブールに固有の生活文化が失われつつあることを示した。

第5章では本研究で得られた成果を総括し、現在増えつつある住宅地開発の再検討の必要性を示すとともに、今後の課題を提示し本論文の結論とした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、アフガニスタン国カブール市における典型的な住宅地区として、①伝統的市街地(シャハレ・コホナ)、②旧マスタープランに違反して形成された市街地(チャハル・カラ)、③旧マスタープランによる開発地区(カイル・カナ)、④現行の制度下で開発された地区(シャハラケ・アーリア)の4地区を選定し、各地区における住宅・街区・街路の空間構成、住宅群における増改築や内部改築などの改善行為の履歴、居住者の社会環境(家族構成・職業など)、外部空間における生活行動といった総合的な観点からの評価を行い、カブール固有の空間形成原理や、現行制度化下で開発された地区の課題について論じ、今後の都市計画への対応を考察したものである。得られた結果を要約すると、以下の通りである。

- (1) カブール市の市街化履歴と旧マスタープランの内容を分析し、社会的・学術的関心が伝統的市街地と現代的開発地区に限定されていることに問題点を見出し、旧マスタープランに違反して形成された市街地における「自然形成的」な空間形成原理の解説と、共産主義下での旧マスタープランによる近代的開発の再評価の必要性を提示し、計4地区の住宅地区を研究対象に選定している。
- (2) 4地区における計101事例の住宅について聞き取りを採取し、これらを類型化した結果、中庭型6タイプ、独立型4タイプ、複合型11タイプ、フラット型2タイプを得ている。シャハレ・コホナは中庭型が基本であり、チャハル・カナは中庭型と複合型の混在、カイル・カナは独立型と複合型の混在、シャハラケ・アーリアはフラット型より形成されていることを明らかにしている。
- (3) これら住宅群について個々の居住者から改善行為の履歴を聞き取り、改善行為を類型化した結果、「水平増築」、「垂直増築」、「独立建屋」、「撤去」、「内部改変」の5タイプがあり、その理由には、主として水回りの増築、世帯の増加への対応、テナント用スペースの拡充、店舗用スペースの拡充、プライバシーの確保、居室の拡張(聞き取りの改変)の6パターンがあることを明らかにしている。
- (4) さらに、増改築の傾向を地区別に検証した結果、チャハル・カラでは5タイプ全ての増改築が見られ、その理由も世帯の増加やテナント・店舗用スペースの拡充など、多岐にわたる住生活の要求が受容されてきたこと、次いでカイル・カナの増改築が多く、「垂直増築」と「独立建屋」の2タイプが主であり、世帯の増加やテナント用スペースの拡充に対応されてきたことを提示している。一方、シャハレ・コホナは増改築事例が少なく、理由も水回りの拡充に限定されていること、シャハラケ・アーリアは居室の拡張に限定されていることを示している。
- (5) 4地区における街路・空地など一連のオープンスペースについて、地区内外の幹線街路との接続性に着目し、公的・半公的・半私的・私的の四段階による階層構成を明示した上で、シャハレ・コホナ、チャハル・カラのような「自然形成的」な市街地ではオープンスペースの階層性が整っているものの、計画市街地では、カイル・カナは半私的レベルに欠落があり、シャハラケ・アーリアでは私的・公的レベルに欠落のあることを明らかにしている。また、カイル・カナにおける欠落は、開発時に整備された公園(半私的レベル)が近年住宅地に転用されたことが要因であり、オープンスペースの担保について制度上の問題のあることが示唆されている。
- (6) 4地区における戸外行動を行動観察とインタビューにより収集し、それらを身体系(運動、仕事、遊び、移動)、社会系(会話、演奏などグループによる行動)、静止系(ぼうつとする、景色を眺めるなど)に分類した上で、行動のタイプとオープンスペースの階層構成との関連性を分析することにより、半私的と半公的レベルのオープンスペースが多世代の人々の重要な社会的接触の場となっていること、特に住宅の玄関との接続性の高いオープンスペースでその傾向が顕著であることを明らかにしている。
- (7) さらに、シャハラケ・アーリアは、イスラムの慣習が厳格とされるアフガニスタンにおいても女性の解放が進んでおり、女性の戸外行動が圧倒的に多く見られる一方、他の3地区で見られた私的レベルの空間における家事、会話、遊びなどの複合的な機能をもった場が失われていることを指摘している。
- (8) 以上をもとに、カブール市におけるこれからの住宅地計画に必要な空間的要件として、階層性が整ったオープンスペースの構成、多様な住要求に対応できる住宅の「柔軟」な空間構成と、「柔軟性」を実現した近代的計画の方法論をとりあげ、中高層を主体とする開発にこれらを具現化するための課題と提案を示している。

以上のように、本論文は社会的・学術的に関心の持たれていない市街地や計画住宅地を総合的観点から評価し、カブール固有の空間形成原理と計画技術を掘り起しその意義を客観的に提示したこと、また、歴史意匠面に関心の偏っていた伝統的市街地について、初めて社会環境や生活行動を包含する総合的な調査を行ったこと、さらに、現代的開発地区も含めた4地区を比較検討することにより、現代的開発の問題点を指摘し、改善の方向性を提示した点で建築工学の発展に寄与すること大である。

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。